

コロナ禍でのオンライン授業に対する学生の認識について —理工学部における語学授業を中心に—

陸 宗均・吉田 諭史・照井 雅子・三木 浩平

1. はじめに

2020年より世界的に蔓延した新型コロナウイルスはあまりにも大きな影響を社会全体へ及ぼした。特に、感染防止の観点から多くの場面において人々の間の接触を減らすことが求められ、この点は教育現場においても様々な影響を及ぼす結果となった。これまで対面で行われてきた講義はウェブ会議ツールを用いた非対面の形式で行うことを余儀なくされ、教育環境は大きく変わる事となってしまった¹。コロナ禍というやむを得ない理由ではあるが、このような教育環境の変化を、特に学生はどのように受け止めているのだろうか。

本稿では、コロナ禍で実施されたオンライン授業に対して学生がどのような認識を持っているのかを調査することを主な目的として、2021年度に近畿大学理工学部の学生を対象として実施したアンケートの結果を報告する。

2. 2020年度、2021年度の各大学における授業実施状況

本稿は上述のように2020年度と2021年度に近畿大学理工学部で実施したオンライン授業に対する学生の認識に関する報告書であるが、アンケートの分析結果を考察する前にコロナ禍による日本の社会的状況を確認すると共に、2020年度と2021年度に日本の大学と近畿大学ではどのように授業を実施してきたのか確認しておきたい。

以下の表1は、コロナ禍における2020年度と2021年度の緊急事態宣言期間と日本の大学（文部科学省，2020a, 2020b, 2020c, 2020d, 2020e, 2021a, 2021b）、および近畿大学理工学部で実施された授業形態を簡単にまとめたものである。

表1. 緊急事態宣言の期間と日本の大学・近畿大学の実施授業形態

区分	2020 年度前期 4 月初～8 月初	2020 年度後期 9 月初～2 月初	2021 年度前期 4 月初～8 月初	2021 年度後期 9 月初～2 月初
緊急事態期間	1 次 2020.04.07～ 2020.05.25	2 次 2021.01.08～ 2021.03.21	3 次 2021.04.25～ 2021.06.20	4 次 2021.07.12～ 2021.09.30
日本の大学	オンライン 90% 併用 6.8% 対面 3.1%	併用 80.1% 対面 19.3% オンライン 0.1%	併用 63.6% 対面 36.4%	併用 63.8% 対面 36.2%
近畿大学 授業形態	オンライン	オンライン	オンライン	併用 50～80%

まず緊急事態宣言がいつ発令されたかを確認すると、2020 年度と 2021 年度の 2 年間にかけて毎学期に 1 回ずつ、計 4 回あった。この期間中、日本の大学で実施された授業形態を確認する。まず 2020 年度の前期、5 月 20 日時点の調査結果（文部科学省，2020a）をみると、全面的にオンライン授業が実施されている大学は 864 校のうち 90.0%あり、対面授業とオンライン授業を併用している大学は 6.8%であった²。その後、6 月 10 日時点における調査結果（回答数：1066 校）では、オンライン授業が全面的に実施されている大学は 60.1%となり、対面授業とオンライン授業を併用している大学は 30.2%となった（文部科学省，2020b）。さらに、7 月 1 日時点における調査結果（回答数：1069 校）をみると、オンライン授業を全面的に実施している大学は 23.8%、対面授業とオンライン授業を併用している大学は 60.1%となり（文部科学省，2020c）、約 1 ヶ月の間に多くの大学において一部の授業で「対面授業」を再開する動きが生じていたことが確認できる。2020 年度後期における授業の実施方針について検討した調査（文部科学省，2020d）によれば、調査に参加した 1060 校のうち、80.1%の大学では対面授業とオンライン授業の併用を計画しており、19.3%の大学が「全面対面」に移行する方針を固めていた。この時点で全面的にオンラインでの実施となったのは、1 校のみであった³。

次に、上記と同様に文部科学省が実施した 2021 年度前期の授業実施方針に関する調査結果（文部科学省，2021a）を確認すると、調査の対象となった 1064 校のうち、36.4%が全面対面という方針を出していた。一方、残りの 6 割強の大学では対面授業とオンライン授業の併用としていたが、授業の半分以上を対面授業とする方針とした大学は 97.4%まで増加していた。同様の傾向は 2021 年度後期の授業実施方針に関する調査結果（文部科学

省、2021b)でもみられた。調査の対象となった1158校のうち、36.2%が全面対面という方針となり、残りの6割強の大学では対面授業とオンライン授業の併用としていた。また、実際の実施状況として公開されているデータとしては、授業の半分以上を対面授業で行う大学は85.6%となっていた。

上述の通り、新型コロナウイルスの流行が始まった2020年の前期には授業形態に関して大きな変動がみられたものの、夏頃までには対面授業が再開され始めた。また、一部の大学では全面対面に移行する例も見られたが、何らかの形で対面授業とオンライン授業を併用する形で対応した大学の割合が最も大きくなった。2021年度に入ると、前期後期ともに3割以上の大学で全面対面に戻る方針となったが、やはり何らかの形で対面授業とオンライン授業を併用する形で対応した大学の割合が最も大きくなった。

ここで近畿大学理工学部における語学科目の授業実施状況をまとめると、2020年度から2021年度の前期までは基本的にはオンラインのみで授業を実施し、2021年度の後期に入った段階でようやく一部の科目において、対面授業とオンライン授業と併用の形で授業が実施された⁴。結果的に学生数が多い近畿大学では三密の危険性から学生と教員の健康を守ることを優先し、2020年度と2021年度の前期授業はオンライン授業のみを実施したと理解される。

3. 調査の概要

本項では、本研究において実施した調査内容について概要を述べる。本調査の目的は、近畿大学理工学部の学生が受講したオンライン授業についてどのような認識を持っているかを調査することで、コロナ禍での語学教育を総括することである。

調査対象科目は、いずれも1年生配当の選択科目である「ドイツ語総合1・2」「フランス語総合1・2」「中国語総合1・2」「韓国語総合1・2」と、1年生配当の必修科目である「英語演習1・2」と2年生配当の必修科目である「TOEIC1・2」で、調査対象者は上記科目の受講生であった。調査は2022年1月13日から2022年2月9日の期間で実施した。調査依頼方法としては、各語学科目の担当に依頼の上、授業内で周知してもらうとともに、同日に一斉実施される必修英語科目の期末試験の会場でも再度の周知を行った。総回答数は1,149件で、そのうち有効回答数は1,057件であった。

質問紙の作成にあたっては、他大学が行った同様の調査や生協が行った学生の生活実態調査(全国大学生生活協同組合連合会, 2022)およびその他の先行研究(大谷, 2020; 岡田, 2021; 高原・宮里, 2014; 平林, 2020; 陸, 2020)を参考にし、本調査で使用する質問項目を精査した。その結果、質問への回答方法としては、多肢選択・複数回答・リッカートスケール(6件法)・自由記述回答を採用した。6件法は回答が中央に集中しないように選

択肢を偶数個にするためである。また、すべての質問項目への回答を必須とした。また、質問デザインが複雑であることが懸念されたため、回答者が雰囲気にならず実態に即して回答できる質問になるよう、また、回答してはいけない人は回答できないよう工夫した。具体的には、Google Forms でセクション区切りを活用し、回答者が該当する質問に飛べるようにし、また、授業形態の違いごとに回答できるように誘導した⁵。

学生対象アンケートは、(1) 回答する学生の背景情報や履修科目について問う全セット共通の質問が 11 項目、(2) 語学科目の授業形態に応じた 3 種の質問セットとして、A：オンライン授業で実施した科目向け (27 項目)、B：オンデマンド授業で実施した科目向け (24 項目)、A&B：オンライン+オンデマンド授業で実施した科目向け (51 項目) で構成される。

4. 基礎データ (Q1-11) について

4.1 学科、学年、語学学習に対する興味関心等

基礎データの概要を以下にまとめる。まず、所属する学科・コース (Q-1) としては、語学科目の開講クラス数が多い理学科や電気電子 (通信) 工学科から若干多くの回答が集まっているが、全体的にはほぼ同等の回答を得ることができた。また、回答者の学年 (Q-9) および履修科目 (Q-10) の結果をクロス集計した結果は付録の各表を参照されたい。それぞれ項目間で多寡があったが、全体的に 1・2 年生はある程度バランスよく回答者を募ることができた。一方、3 年生以上は回答者が少なかったため、今回の分析からは除外した。

語学学習の側面で見ると、「語学学習が好きか否か」を問う設問 (Q-2) において「普通」程度が多いが、どちらかという「嫌い」側に寄った傾向がみられた。また、「語学学習は得意であると思いますか」(Q-3) では、7 割を超える学生がどちらかといえば「不得意」と認識していた。これらのデータは、理工系学生を対象とした英語教育を取り巻く環境や問題点を示唆している。

4.2 授業形態、履修時に利用した端末等の基礎データ

2021 年度時、理工学部では「語学科目は基本的にオンライン (またはオンデマンド) で実施する」といった学部の授業運営方針が打ち出されたため、8 割以上の回答者が前期後期ともに「オンライン」での実施であったと回答した (Q-11)。一方、オンデマンドでの実施は少数にとどまった⁶。そのため、今回の報告からは除外することとした。

オンライン授業を履修する際に利用した端末 (Q-5) としては、約 98% の回答者がパソコンを利用しており、突出していた。より詳細にみると、PC 端末のみを利用した学生が

7割ほどおり、PC 端末とスマートフォンの併用が2割程度であった。タブレット端末の利用者（その他の端末との併用者を含む）もみられたが、5%未満であった。自宅の通信環境については、9割近くが満足していた（Q-7）。Q-5の通り、約98%の学生が汎用性の高いPC 端末で接続していたため、多くの学生が受講環境としては適切な状況で受講していた様子がみてとれる。一方、大学の通信環境には7割近くが満足していた（Q-8）。いわゆるコロナ禍当初は学内のIT インフラ整備が大きな課題となっていたため、インターネット回線の面で不安要素を抱えていたが、及第点には達していたと思われる。

また、オンライン授業に関する学生側の意識や評価を検討する際には、「対面」から「オンライン」に授業形態が変更される際に伴う学生側の利便性についても十分検討する必要性があった。そのため、参考情報として、学生の通学時間について回答を依頼した（Q-4）。通学（片道）に費やす時間の概要としては、最頻値は1時半ほどであり、また最大値は3.5時間であった。大阪に限らず、関西近郊から多く学生が通学している結果が数値に表れていた。

5. 「オンライン授業に関するアンケート」の結果概要

今回もっとも回答者が多くなった設問セット A 「オンライン授業に関するアンケート」の結果を以下にまとめる。各設問の回答結果を考察すると、以下の傾向がみられた。

- (1) 9割がオンライン授業に「満足」していた。
- (2) 回答者の半数が語学授業（※）は「オンラインが適切」と回答した。
※自身が回答した受講科目
- (3) 教員の授業準備や ICT スキル、フィードバック、課題の分量は概ね「適切」と評価された。
- (4) 全体的にオンライン授業が円滑に進行されていた。
- (5) オンライン授業であっても、集中して授業に臨んだ学生が多く、一定以上は授業内容についても理解できていた。
- (6) 学生はカメラ ON にすることに抵抗感があり、カメラ OFF での環境を好む傾向があった。
- (7) 教員裁量が認められている「授業内活動」については、科目の性質により若干のバラツキがみられた。
- (8) 小テストの実施は積極的に行われており、学生もある程度の準備をして臨んでいた。
- (9) オンライン授業に満足した要因も満足できなかった要因も必ずしも授業内容や学習効果に起因するものだけではなかった。

(1)から(9)の概要を以下にまとめる。

- (1) 9割がオンライン授業に「満足」していた。
- (2) 回答者の半数が語学授業(※)は「オンラインが適切」と回答した。

※自身が回答した受講科目

今回回答者が回答対象とした「オンライン授業」の満足度をみると、約9割の学生が程度に違いはあるものの「満足している」結果となった(A-22)。実際に、今回回答の対象とした科目において効果的に学習するためにもっとも適切な授業形態については、約半数が「オンライン」を選択していた。一方、従来の「対面」については3割程度であった。

- (3) 教員の授業準備やICTスキル、フィードバック、課題の分量は概ね「適切」と評価された。
- (4) 全体的にオンライン授業が円滑に進行されていた。

学生側からみた教員のオンライン授業に向けた準備状況(PPT作成、Google Classroomの設定、動画の準備 etc.)については、約半数の学生がもっとも肯定的な選択肢である6を選択しており、全体的には約9割の学生から肯定的な回答を得る結果となった(A-1)。また、ICTスキルの習得状況に対する評価(A-2)をみても、約9割の学生が肯定的な選択肢を選択していた。こういった傾向がみられたことにより、教員がどの程度オンライン授業を円滑に進行していたかといった点についても、約9割の学生が肯定的な選択肢を選択しており、そのうち肯定度が高い選択肢5と選択肢6に約65%の回答が集まった(A-3)。今回調査を実施した2021年度はコロナ禍に端を発したオンライン授業実施が2年目であったため、多くの教員がオンライン授業の運営に必要なICTスキルを身につけており、また、十分な事前準備をして授業に臨んだ様子が確認できた。

次に、より具体的な授業の様子をみると、オンライン授業内外における質問への回答やフィードバックについては、約9割の学生が肯定的な選択肢を選んでおり、オンライン授業でも十分なフィードバックが与えられていたことがみてとれる(A-4)。この点は、オンライン授業に向けてGoogle Classroomなどの授業運営ツールが充実したこともあり、オンライン上での課題配信や回収、それに伴うフィードバックの機会を十分に得られたことを示唆している。次に、課題の分量に目を向けると、約8割の回答が肯定否定の間にある選択肢3と選択肢4に集中する結果となった(A-5)。また、学生の視点から配当された課題の分量が適切であったかについて評価してもらったところ、約9割の回答が肯定的な回答であった(A-6)。近畿大学の学内に限らず、オンライン授業では従来の対面授業よりも授業内外で実施する課題が多くなる傾向があり、学生側にとっては大きな負担に

なっている様子がオンライン授業の問題点としてニュース等でも連日放送されていたが、理工学部の語学教育においては、この点はそれほど大きな問題ではなかったといえよう。

(5) オンライン授業であっても、集中して授業に臨んだ学生が多く、一定以上は授業内容についても理解できていた。

オンライン授業にどの程度集中して臨んでいたかを問う設問（A-12）をみると、9割以上が肯定寄りの回答となった。ただし、今回はオンラインアンケートの仕様上、学籍番号をベースした大学のメールアドレスを取得していることから一種の記名式アンケートと同様の要素を含むことから、否定的な回答を選ぶことが憚れた可能性も否めない。では、オンライン授業を通して授業内容はどの程度理解できていたかを見ると、約9割が肯定的な回答をしていることから、「オンライン授業」であっても学習を阻害することはそれほどない可能性が示唆される（A-13）。

(6) 学生はカメラ ON にすることに抵抗感があり、カメラ OFF での環境を好む傾向があった。

ここからは、オンライン授業時におけるカメラの ON/OFF に関連した項目の回答結果の概要を報告する。まず、オンライン授業の履修時にどの程度カメラを ON にしていたかについて確認したところ、6割以上の学生が授業開始から終了までカメラを OFF にしていた（A-14）。また、基本的には OFF としていたが、教員側の指示があった場合（例：Zoom 内でのブレイクアウトセッション参加時）には ON にしたと回答した学生が2割程度となった。また、受講時のカメラ ON に関する状況を複数選択形式で問うた A-16 をみても、カメラ ON にしたのは「教員の指示があったから」に多くの回答が集まっていた。これらの結果は、近畿大学の方針として学生にカメラ ON を無理強いすることがないよう、教員に通知があったことに起因すると考えられる。また、このようにある意味では自由が与えられている環境が「オンライン授業」が好意的に受け入れられた要因のひとつになる可能性が高い（後述する A-23、24 を含めて後ほど詳細に考察する）。一方、約1割の学生が授業開始から最後までカメラを ON にして参加していた。この点は学生の自主的な判断によるものであれば問題ないが、教員側が ON にして終始参加するように指導している例があったため、今後教員側のアンケートを踏まえてより詳細に検討を行う所存である。

次に、学生側にカメラ ON/OFF の選択権がある環境において、授業中にカメラを ON にすることにどの程度抵抗があったのか、という点について確認したところ、抵抗の度合いが中間以上となる選択肢 4、選択肢 5、選択肢 6 に6割以上の回答が集まったことから、

概してカメラ ON に対してある程度「抵抗があった」学生が多かったことがわかる (A-15)。この点と関連して、約 6 割の学生がカメラを ON にすることが必ずしも語学学習に効果的ではない」と認識していた点も注目に値する (A-17)。語学学習では、コミュニケーションをする相手の表情やしぐさも重要な意思疎通のツールとなるため、カメラ ON にすることが望ましいと考える教員が多いと思われるが、学生側の意見は異なるようであった。ここで、オンライン授業時にカメラ OFF を選択した際の状況をみると、「教員から OFF で参加してよい」という指示があって OFF にした学生が多くみられる一方、自身の「身だしなみ」や「部屋」、「家族」が映り込むことを懸念したり、「顔をみられたくない」等の理由で OFF にした学生も一定数みられた。このあたりの回答が、カメラ ON への抵抗感につながっている可能性が高いと考えられる。

では、カメラ OFF の状態で語学学習を行うことをどの程度効果的と考えているのかについてみると、先の設問 A-17 とは異なり、回答は肯定否定の中間となる選択肢 3 と選択肢 4 に集中しており、「効果的でない」(選択肢 1、2、3) と「効果的である」(選択肢 4、5、6) にほぼ半々に分かれ、それぞれ同様の分布となった。先の設問 A-16 や設問 A-17 と照らし合わせると、「カメラを ON にする必要は必ずしもなく、OFF で学習してもある程度の効果は期待できる」と考える学生が大半を占めている可能性が示唆された。

(7) 教員裁量が認められている「授業内活動」については、科目の性質により若干のバラツキがみられた。

オンライン授業におけるペアワーク、グループワークの実施頻度については、回答にバラツキがみられた (A-7)。英語科目では、統一シラバスを採用しているが、「アクティブラーニング」の実施に関しては、各教員の裁量が認められているため、その反映と捉えることができる。また、オンライン授業時における発話(単語の発音、音読、口頭で発表など)を伴う活動の実施頻度については、8 割以上が選択肢 4「ある程度設けられていた」以上を選択していた (A-8)。この点は語学科目の性質を反映していると考えられる。今回は座学中心となる TOEIC の履修者が全体の約 33% を締めているが、3「あまり設けられていなかった」以下の回答が 20% 程度にとどまっていることを踏まえると、科目の性質に関わらず、何らかの発話活動(おそらく単独で実施する活動)が行われていた様子がわかる。

その他、オンライン授業時に発言を行う機会⁷の頻度としては約 8 割が選択肢 4「ある程度設けられていた」以上を選択していた (A-9)。また、オンライン授業時に先生に対してどの程度質問したり、意見を述べたりできたかについては、6 割以上が選択肢 4「ある程度できた」以上を選択していた (A-20)。機会の提供 (A-9) と実際にそれができた

か (A-20)、という視点でみると、機会は十分に提供されていても必ずその機会を十分に活用できない学生がいたことが示唆された。より学生が発言をしやすいような環境や提供方法について検討することが今後の課題であろう。また、オンライン授業時にどの程度友達に質問したり、相談できたかについては、肯定否定の中間となる選択肢3と選択肢4に回答が集中した (A-21)。選択肢4「ある程度できた」以上でみると約半数となったが、TOEIC など座学中心の授業では基本的には一人で問題を解く授業スタイルが一般的であることから、ある程度はクラスメイトとコミュニケーションを図ることができたものと思われる。

(8) 小テストの実施は積極的に行われており、学生もある程度の準備をして臨んでいた。

オンライン授業に向けた講習会等において多くの教員が頭を悩ませていた小テストの実施頻度をみると、7割以上が選択肢4「ある程度設けられていた」以上を選択していた (A-10)。当初の予想に反して、積極的に小テストが実施されていた様子がみとれる。一方、学生側が小テストにどの程度準備して望んでいたかについて見ると、半数が選択肢4「ある程度準備して臨んだ」を選択していた (A-11)。選択肢1「全く準備せずに臨んだ」を選択した学生が約1割みられたものの、多くの学生はある程度準備をした上でオンライン授業における小テストに臨んでいたことが分かった。

上記の回答結果をみると、オンライン授業における小テストがある程度機能していたようにも映るが、やはりオンライン上では監視の目が行き届かないこともあり、学生は解答中にテキストや資料、またはインターネット等から解答にアクセスしやすい。そのため、オンライン授業における小テストには常にこういった問題が付きまとうことを改めて教員側が認識しておく必要もあるであろう。そのため、辞書やインターネットにアクセスできる環境でもなお学生の語学力を測定することが可能なオンライン授業ならではの小テストの開発が重要であろう。この点については、別途取得している教員側のアンケート結果も踏まえて、今後さらなる考察を進めたい。

(9) オンライン授業に満足した要因と満足できなかった要因は必ずしも授業内容や学習効果に起因するものだけではなかった。

ここまでみてきた様々な要因の他、具体的にオンライン授業に満足した要因について、また、満足できなかった要因について以下に具体的に回答を依頼した設問の結果概要をまとめる。

オンライン授業に満足した要因として複数選択式の回答を募ったところ、半数の回答者が「オンライン授業が円滑に行われていた」を、約25%割程度の回答者が「1人で受講

できるため、集中できた」を選択しており、それぞれオンライン授業に対して積極的な様子がみとれる。さらに、約3割の回答者が「スライド、動画、Google Classroom上の教材・資料がオンライン授業に役立った」という、オンライン授業ならではの要因として選択していた。オンライン授業においてはオンライン上で配布される教材・資料が学生の満足度につながっていることは、これからのオンライン授業の質を上げるために最も期待することとして「オンライン授業に適した教材・資料で受講できる」といった点が2番目に多い得票だったことから裏付けられる (A-25)。

一方、約半数の回答者が「通学する必要がなかった」を、4割程度の回答者が「感染リスクがなかった」を、また、3割程度が「自分の都合のいい場所で受講できた」といった授業内容やその授業効果とは直接関係しない要因を選択していた。満足できなかった理由としては、約25%の回答者が「クラスメイトに会えなかった」や「端末の画面を長時間見続けることによって疲労感があった」を選択していた (A-24)。

これらの結果を踏まえると、今回のアンケート調査では全体的にオンライン授業に対して好意的な結果が得られているが、必ずしも授業効果の側面から好意的であるとは限らない。また、満足できなかった主たる要因についても、直接授業内容やその教育効果に関わるものへの回答は多くはなかった。

6. 結論

上述の通り、今回のアンケートでは、約9割の学生が程度に違いはあるもののオンライン授業に「満足している」結果となった (A-22)。その要因としては、まず教員側がコロナ禍の2年間において、オンライン授業を行う上で必要なICTスキルを身につけ、入念な授業準備を行ったことがあげられる。上記の各事項で確認した通り、全体的に円滑な授業運営がなされており、フィードバックや課題の分量も概ね「適切」と評価されていた。また、科目の性質や教員の裁量によって多少のバラツキはあったが、発話・発言の機会も概して十分に提供されていた点も、語学科目におけるオンライン授業の実施に際して有益に働いたと考えられる。また、当初懸念していた小テストについても、予想に反して、十分に機能した様子がデータから示された。専任教員のみならず、非常勤講師も含めた教員側全員の努力により、上記のような充実したオンラインでの学習環境が提供されたため、学生側も安心し、かつ集中して授業に臨むことができたものと思われる。そのため、オンライン授業であっても学生は語学の授業内容をしっかりと理解できた、と結論づけても差し支えないだろう。

次に、学生側の視点からオンライン授業に満足した要因をまとめると、オンライン授業ならではのメリットを認識した上で好意的な回答をしているケースがみられた。例えば

「1人で受講できるため、集中できた」、「スライド、動画、Google Classroom上の教材・資料がオンライン授業に役立った」など、オンライン授業ならではのメリットを満足した要因としてあげている学生がこれに該当する。こういった学生は、おそらく個人の学習スタイルにオンライン授業が合致したものと思われる。

一方、学生ならではの視点から、授業内容やその授業効果とは直接関係しない、オンライン授業のメリットを感じているケースも少なからず見られた。例えば、片道平均90分程度となる「通学」が発生しないことや受講場所をある程度自由に選択できることによる利便性、感染リスクを軽減することによる安全性などから、オンライン授業を好意的に評価している。また、前述の通り、近畿大学では、学生側にカメラON/OFFの選択権を与えていたため、カメラOFFの学習環境を好む学生にとって、自身の判断で顔を出さずに済むオンライン授業は都合がよかったと解釈できるかもしれない。こうした点については、参加学生の生の声を反映した記述回答を分析し、今後より詳細な検討を行いたい。

いずれにしても、教員側がコロナ禍における2年の間にオンライン授業を行う上で不断の努力を行ったことにより、理工学部におけるオンライン授業は十分に機能したといえる。今後は、基本的には対面授業での実施となるが、このコロナ禍で身につけた知識とスキルを活用し、より活発的な語学活動が行われることを願いたい。

引用文献

- 大谷杏 (2020) 「新型コロナウイルスの影響による大学の英語オンライン授業－実践、その評価と課題－」, 『関西英語教育学会紀要』 44, 21—39.
- 岡田佳子 (2021) 「学生からみたオンライン授業のメリットとデメリット－オンライン環境下のアクティブラーニングに焦点を当てて－」, 『長崎大学 教育開発推進機構紀要』 11, 25—41.
- 高原利幸, 宮里心一 (2021) 「オンライン講義と対面講義における学生の意識比較」, 『工学教育研究』 29, 51—57.
- 平林信隆 (2020) 「コロナ禍における大学のオンライン授業に対する 新入生の認識についての探索的研究」, 『共栄大学研究論集』 19, 56—66.
- 陸宗均 他 (2020) 「近畿大学第二外国語科目に関する意識調査報告」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要』 11(1), 151—174.
- 文部科学省 (2020a) 「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況について (令和2年5月20日時点)」
https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf
 (2023年5月20日閲覧)

文部科学省（2020b）「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況（令和2年6月1日時点）」

https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt_kouhou01-000004520_6.pdf

（2023年5月20日閲覧）

文部科学省（2020c）「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況（令和2年7月1日時点）」

https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf

（2023年5月20日閲覧）

文部科学省（2020d）「大学等における後期授業の実施方針の調査について（令和2年9月15日）」

https://www.mext.go.jp/content/20200915_mxt_kouhou01-000004520_1.pdf

（2023年5月20日閲覧）

文部科学省（2020e）「大学等における後期授業の実施方針の調査について（地域別状況）（令和2年10月2日）」

https://www.mext.go.jp/content/20201002-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf

（2023年5月20日閲覧）

文部科学省（2021a）「令和3年度前期の大学等における授業の実施方針等について」

https://www.mext.go.jp/content/20210702-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf

（2023年5月20日閲覧）

文部科学省（2021b）「令和3年度後期の大学等における授業の実施方針等に関する調査の結果について（令和3年11月19日）」

https://www.mext.go.jp/content/20211118-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf

（2023年5月20日閲覧）

全国大学生生活協同組合連合会（2022）「第57回（2021年秋実施）学生生活実態調査 速報 2022年1月31日」

<https://classroom.google.com/u/0/w/NDE2Mjg2OTgxMzUz/t/all>

（2023年5月22日閲覧）

<付録>

アンケート集計結果の表

Q-1. 所属する学科・コースを選択して回答してください。		
	回答数	パーセント
応用化学科	133	12.6
機械工学科	138	13.1
社会環境工学科	104	9.8
情報学科	156	14.8
生命科学科	109	10.3
電気電子工学科	202	19.1
理学科 化学コース	81	7.7
理学科 数学コース	90	8.5
理学科 物理学コース	44	4.2
合計	1057	100

Q-2. 語学学習は好きですか。		
	回答数	パーセント
1 (嫌い)	102	9.6
2	158	14.9
3	286	27.1
4	362	34.2
5	107	10.1
6 (好き)	42	4
合計	1057	100

Q-3. 語学学習は得意であると思いますか。		
	回答数	パーセント
1 (不得意)	208	19.7
2	289	27.3
3	311	29.4
4	203	19.2
5	36	3.4
6 (得意)	10	0.9
合計	1057	100

Q-4. 通学時間（片道）はどの程度かかりますか？分単位で記載してください。

（例：1時間20分は「80」と記入してください。）

時間（分）	回答数	パーセント	時間（分）	回答数	パーセント
0	1	0.1	60	141	13.3
2	2	0.2	65	3	0.3
3	5	0.5	70	64	6.1
4	1	0.1	75	16	1.5
5	46	4.4	80	80	7.6
6	1	0.1	85	4	0.4
7	1	0.1	90	220	20.8
10	70	6.6	95	4	0.4
12	2	0.2	100	49	4.6
15	64	6.1	105	6	0.6
20	43	4.1	110	14	1.3
25	5	0.5	120	47	4.4
30	62	5.9	130	5	0.5
35	5	0.5	135	2	0.2
40	29	2.7	140	5	0.5
45	13	1.2	150	7	0.7
50	33	3.1	160	1	0.1
55	3	0.3	180	2	0.2
			210	1	0.1
合計				1057	100

Q-7. ご自身で用意した通信環境の満足度はいかがでしたか。

	回答数	パーセント
1. 全く満足していない	13	1.2
2. ほとんど満足していない	35	3.3
3. あまり満足していない	75	7.1
4. ある程度満足している	273	25.8
5. ほぼ満足している	470	44.5
6. 完全に満足している	191	18.1
合計	1057	100

Q-8. 大学内で利用した通信環境の満足度はいかがでしたか。

	回答数	パーセント
1. 全く満足していない	47	4.4
2. ほとんど満足していない	56	5.3
3. あまり満足していない	177	16.7
4. ある程度満足している	430	40.7
5. ほぼ満足している	267	25.3
6. 完全に満足している	80	7.6
合計	1057	100

A-1. 先生はこのオンライン授業のために事前準備（PPT作成、Google Classroomの設定、動画の準備 etc.）をどの程度行っていましたか。

	回答数	パーセント
1. 全く行っていなかった	9	0.9
2. ほとんど行っていなかった	22	2.1
3. あまり行っていなかった	43	4.1
4. ある程度行っていた	203	19.2
5. ほぼ行っていた	276	26.1
6. 完全に（毎回）行っていた	504	47.7
合計	1057	100

A-2. 先生はこのオンライン授業を運営するために必要なICTスキル（コンピュータ利用や会議システム利用に必要なスキル）をどの程度身につけていると感じましたか。

	回答数	パーセント
1. 全く身につけていなかった	6	0.6
2. ほとんど身につけていなかった	22	2.1
3. あまり身につけていなかった	69	6.5
4. ある程度身につけていた	450	42.6
5. かなり身につけていた	325	30.7
6. 完全に身につけていた	185	17.5
合計	1057	100

A-3. 先生はこのオンライン授業をどの程度円滑に進行していましたか。

	回答数	パーセント
1. 全く円滑に進行していなかった	9	0.9
2. ほとんど円滑に進行していなかった	14	1.3
3. あまり円滑に進行していなかった	45	4.3
4. ある程度円滑に進行していた	299	28.3
5. ほぼ円滑に進行していた	461	43.6
6. 完全に（毎回）円滑に進行していた	229	21.7
合計	1057	100

A-4. 先生はこのオンライン授業の内外でどの程度質問に回答したり、フィードバックをしてくれましたか。

	回答数	パーセント
1. 全くしてくれなかった	4	0.4
2. ほとんどしてくれなかった	8	0.8
3. あまりしてくれなかった	34	3.2
4. ある程度してくれた	347	32.8
5. かなりしてくれた	374	35.4
6. 完全に（毎回）してくれた	290	27.4
合計	1057	100

A-5. このオンライン授業における課題の量はどの程度ありましたか。

	回答数	パーセント
1. 全くなかった	20	1.9
2. かなり少なかった	79	7.5
3. やや少なかった	317	30
4. やや多かった	534	50.5
5. かなり多かった	79	7.5
6. 非常に多かった	28	2.6
合計	1057	100

A-6. このオンライン授業における課題量は適切（学習量と課題量）でしたか。

	回答数	パーセント
1. 全く適切ではなかった	14	1.3
2. ほとんど適切ではなかった	21	2
3. あまり適切ではなかった	77	7.3
4. ある程度適切だった	489	46.3
5. ほぼ適切だった	308	29.1
6. 完全に適切だった	148	14
合計	1057	100

A-7. このオンライン授業においてペアワーク、グループワークの機会はどの程度設けられていましたか。

	回答数	パーセント
1. 全く設けられていなかった	258	24.4
2. ほとんど設けられていなかった	132	12.5
3. あまり設けられていなかった	191	18.1
4. ある程度設けられていた	230	21.8
5. かなり設けられていた	137	13
6. 完全に（毎回）設けられていた	109	10.3
合計	1057	100

A-8. このオンライン授業において、発話（単語の発音、音読、口頭で発表など）を伴う活動はどの程度設けられていましたか。

	回答数	パーセント
1. 全く設けられていなかった	52	4.9
2. ほとんど設けられていなかった	65	6.1
3. あまり設けられていなかった	104	9.8
4. ある程度設けられていた	362	34.2
5. かなり設けられていた	255	24.1
6. 完全に（毎回）設けられていた	219	20.7
合計	1057	100

A-11. このオンライン授業における小テストにはどの程度準備をして臨みましたか。

	回答数	パーセント
1. 全く準備せずに臨んだ	103	9.7
2. ほとんど準備せずに臨んだ	59	5.6
3. あまり準備せずに臨んだ	193	18.3
4. ある程度準備して臨んだ	529	50
5. かなり準備して臨んだ	99	9.4
6. 完全に（毎回）準備して臨んだ	74	7
合計	1057	100

A-12. このオンライン授業にどの程度集中して参加しましたか。

	回答数	パーセント
1. 全く集中せずに参加した	12	1.1
2. ほとんど集中せずに参加した	8	0.8
3. あまり集中せずに参加した	84	7.9
4. ある程度集中して参加した	559	52.9
5. かなり集中して参加した	274	25.9
6. 完全に（毎回）集中して参加した	120	11.4
合計	1057	100

A-13. このオンライン授業を通して授業内容をどの程度理解できましたか。

	回答数	パーセント
1. 全く理解できなかった	8	0.8
2. ほとんど理解できなかった	18	1.7
3. あまり理解できなかった	72	6.8
4. ある程度理解できた	686	64.9
5. かなり理解できた	214	20.2
6. 完全に（毎回）理解できた	59	5.6
合計	1057	100

A-15. このオンライン授業においてカメラを ON にすることにどの程度抵抗がありましたか。

	回答数	パーセント
1. 全く抵抗はなかった	131	12.4
2. ほとんど抵抗はなかった	99	9.4
3. あまり抵抗はなかった	167	15.8
4. 少し抵抗があった	341	32.3
5. かなり抵抗があった	169	16
6. 非常に抵抗があった	150	14.2
合計	1057	100

A-17. カメラを ON にして授業を受けることは語学学習にどの程度効果的であると考えますか。

	回答数	パーセント
1. 全く効果的でない	143	13.5
2. ほとんど効果的でない	156	14.8
3. あまり効果的でない	326	30.8
4. ある程度効果的である	381	36
5. かなり効果的である	33	3.1
6. 非常に効果的である	18	1.7
合計	1057	100

A-19. カメラを OFF にして授業を受けることは語学学習にどの程度効果的であると考えますか。

	回答数	パーセント
1. 全く効果的でない	65	6.1
2. ほとんど効果的でない	73	6.9
3. あまり効果的でない	372	35.2
4. ある程度効果的である	450	42.6
5. かなり効果的である	49	4.6
6. 非常に効果的である	48	4.5
合計	1057	100

A-20. このオンライン授業中は、どの程度先生に質問したり、意見を述べたり
できましたか。

	回答数	パーセント
1. 全くできなかった	50	4.7
2. ほとんどできなかった	96	9.1
3. あまりできなかった	225	21.3
4. ある程度できた	502	47.5
5. かなりできた	116	11
6. 非常に（毎回）できた	68	6.4
合計	1057	100

A-21. このオンライン授業中は、どの程度友達に質問したり、相談したりでき
ましたか。

	回答数	パーセント
1. 全くできなかった	148	14
2. ほとんどできなかった	148	14
3. あまりできなかった	223	21.1
4. ある程度できた	394	37.3
5. かなりできた	96	9.1
6. 非常に（毎回）できた	48	4.5
合計	1057	100

A-22. このオンライン授業にはどの程度満足していますか。

	回答数	パーセント
1. 全く満足していない	16	1.5
2. ほとんど満足していない	26	2.5
3. あまり満足していない	74	7
4. ある程度満足している	521	49.3
5. かなり満足している	275	26
6. 完全に満足している	145	13.7
合計	1057	100

注

- 1 第1次緊急事態宣言により、近畿大学東大阪キャンパスでは授業の開始は2020年4月6日から5月11日に変更された。
- 2 本稿では、文部科学省（2020a）で用いられている「面接授業」、「遠隔授業」という用語をそれぞれ「対面（授業）」と「オンライン（授業）」と表記した。また、両方の授業形態を共に実施している場合には「併用」とした。
- 3 地域別にまとめられた結果（文部科学省，2020e）をみると、感染拡大状況等を踏まえて地域差がみられており、感染者が多く確認された関東地方で全面対面に移行する方針を打ち出している大学は8.8%、近畿地方では15.2%となり、全体よりも低い傾向が見られた。
- 4 2021年の前期は、三日間対面授業実施した後（2021.04.05～07）、緊急事態宣言によりオンライン授業へ変更した。2021年10月8日以降、「令和4年度 近畿大学工学部_学内入構制限措置（施設利用）対応表 ※令和4年8月2日現在」に従い、当時の状況を「STAGE 2（感染状況観察 移行段階【入構抑制1】）」と判断し、授業形態は「一部「メディア授業」で実施、十分な感染防止対策の上、可能な限り収容定員の2/3以下（試験定員）の範囲内で、対面実施可」とした。結果、各学部では約5割以上8割以下を目途に対面授業を実施した。
https://www.kindai.ac.jp/engineering/news/topics/_upload/20220802_korona_taiouhyo.pdf（2023年5月20日閲覧）
- 5 調査対象者には近畿大学が発行しているメールアドレスでログインし、Google Forms上で回答するよう依頼し、連絡用メールアドレスは自動的に取得する旨を通知した。倫理面での配慮として、部門主任の名前で調査依頼をし、問い合わせ担当者の氏名とメールアドレスを公開した。調査への参加・協力の自由意思の確認と、プライバシー及び個人情報の保護の確認も明記した。
- 6 Oral Englishなど、一部の科目では当該科目における統一した対応としてオンデマンド授業が実施されていた。そのため、本調査ではオンデマンド型で実施された語学科目を対象としたアンケート項目も用意していたが、各年次において複数の外国語科目を履修している場合にはそれぞれ別途アンケートに回答する必要があったことや、Oral Englishの授業内では直接依頼はしておらず、「英語演習2」および「TOEIC 2」の授業内、またはこれらの科目の定期試験後に回答依頼をしたため、Oral Englishに関する回答はほぼ得られなかった。そのため、オンデマンド授業に関する回答は多く得られなかった。
- 7 「発言」についての定義が曖昧であり、「発話」との区別がしづらい項目であったた

め、A-8 と A-9 ではほぼ同様の結果となった。連関や相関等を確認の上、質問項目の再考が必要である。また、A-20 もこれらの項目と似通った表現になっており、「機会の提供か」、「実際に学生がそれを実行できたか」、という2つの解釈が可能な質問項目にもみえる。そのため、類似の項目間での連関や相関等を確認する等、解釈する際には注意が必要である。